

連載

電子メールの罪悪

石垣 武男

私が電子メールを始めたのは多分18年前くらいである。当時はもちろん携帯メールなど存在しなかったのでパソコンでの電子メールである。大学からアドレスをもらったのはいいが使い方が分からないしメールを送る相手も見当たらないので放ってあった。東京での会議の席である先生が「じゃあ、明日電子メールで送りますのでアドレス教えてください」と言われ当惑したものである。帰宅して食事の席でその話をしたところ大学へ入学したての長女が「私メールアドレス持ってるわよ」。これは自分も真面目に使い方を取寄せねばというわけで本格的に使い始めたわけである。本当に届いているのか？届いても相手がメールを開いて見ているのか？返事が来ないのは届いていないのでは？返事を相手が出してもこちらに届いていないのでは？など等余計な心配をしながら、当初は電話でメールを送った旨伝えたことも多々あった。

文書や図、スライドが添付できて送れるようになると確かに便利で依頼原稿も郵送するより楽で、なにしろ締切の日まで粘っても相手に迷惑かけないという安心感がある。会議の際にもあらかじめ資料が送られて来れば事前に資料を検討することもできるので仕事の効率化にも役立つのが電子メールである。しかし実際にはそれが日常のこととなるとそうはいかなくなるのが人間の習性でもある。少し慣れてくると受け取った方もメールを開けば資料が見られるという安心感から、ひどい時はいつしか資料を読んだ気にさえなって会議に臨む。会議の席でパソコンを開いて初めて資料を見る、などということも往々にしてある。結局その場で配布された資料を見るのとあまり変わらないという結果になってしまう。事前に送られた資料を隅から隅までじっくり見て会議に臨むという性格の人物であればそのようなことはないであろうが、電子メールという手段が普及しても人の性格や几帳面さというのは変わりようがないので致し方ない現実なのである。事前に送れば資料を読んで会議に臨むであろう、そうすれば初めて資料を会議の席で目にするよりは会議が円滑に進むであろうというのは主催する側の都合の良い解釈でしかないのである。資料を事前に目に見ている者とその場で初めて目にする者との間に理解の差が拡大するだけで却っ

で会議が長引くという逆効果が出るのが関の山である。

便利な電子メールが生活の基盤となると困ることは沢山でてくる。私にとって最大の弊害は「メール会議」である。時間も、金もないので集まるのはやめてメール会議にしましょうというシナリオである。自分が受け身の場合であればメール会議で議題が流れてきても興味なければ返信しなければいい。どうでもいい事柄なら承諾の返信だけすればことが足りる。しかし、自らがまとめ役の立場でメール会議という手段をとられるとはなはだ困惑する。簡単な議案の賛否のみまとめるのであれば楽だが大体はそうはいかない。面と向かっての会議ではお互いに自分の言葉で議論するものの、ちょっとした解釈の違いなどを理解して結論を導くことができる。メール会議では自分の考えを文章にするのが容易ではなくそれを読んだ相手がまたその人の物差しで解釈するので誤解が誤解を呼ぶ結果を招きかねない。もっと問題はメールを見てない人や、見ても返事をくれない人である。防護策としてメールを受け取ったらその旨をまず知らせるという約束を最初に決めても守るひとは半分もないのが常である。メールで意見が集まっても言いたい放題のものが含まれると集約するのが難しい場合もある。そうなると主催者側の思い通りに事を進めてしまう恐れが生じ最悪な事態となってしまう。

電子メールは便利で一見対話があるようであるが、実際にはそうはならないのが現実であろう。電子メールはキーボードで作成して「送信」すれば事が足りる。相手に意志が伝わったと送信側が勘違いするのである。言葉で伝えれば誤解も防ぐことが出来るし、忘れられることもあろう。電子メールでは忘れられても文字は残る。

(名古屋城北放射線科クリニック院長)